

エブリデイ・エブリナイト

さくら

マコ

佳織

黒田

岩下

双子（姉）

双子（弟）

勇作

一軒の家、世の果ての。

1

夜。

シナリオライターの石本さくら、仕事をしている。

玄関に人の気配がして。

イラストレーターの森マコ、現れる。

さくら「おや」

マコ「こんにちは」

さくら「こんばんはでしょ」

マコ「お、仕事しとるね。はい。プリン」

さくら「なに、どうしたの」

マコ「しばらく、やっかいになります」

さくら「ええ」

マコ「あら、だめ？」

さくら「ああ。ちょっと、めずらしく」

マコ「めずらしく、なに。あ、そうか、仕事か。映画？」

さくら「ならまだいいけど。ラジオドラマ書いてて」

マコ「そっか。邪魔かな、あたしお邪魔になるかな」

さくら「いやいや、あー。うー。そうなったらそうなったモードで行こうかな」

マコ「あ、そ。じゃそうして。なに、モードって」

と、マコ、プリンを食べる。

マコ「うま。夜道は相変わらず、暗いな。あかりつけたら、玄関さき」

さくら「でも、ここだけの問題じゃないから」

マコ「そうだけど。ケモノになった気分でここまで走ったよ」

さくら「あ。そういや、マコ、ケモノっぽいね」

マコ「なにいまさら」

さくら、冷蔵庫から、お茶とか出して。プリンを食べる。

さくら「あ、そうか。辞めたのか、あの仕事」

マコ「ああ、はるみ緒方のママクックでしょ」

さくら「すごいすごいって思ってたのに」

マコ「え、あんたが、うそでしょ。興味ないでしょ」

さくら「ないけど、マコがイラスト描いてたら、買うよ」

マコ「で読まないでしょ」

さくら「うん。読まないけど、絵は見るさ」

マコ「あ。それ、いやだな。本のイラストって読んでこそ、絵の本質がわかるんだから。ま、でもやらないことになったんだけど」

さくら「なんで辞めたの。いい仕事じゃない」

マコ「いろいろあってさ」

さくら「そうか」

マコ「だって、ごはんまずそうなんだもん」

さくら「あー。それは、いかんな」

マコ「まあね。無理だとは思ってたけど。われながら、早かったな」

さくら「ちょっと、そんなとこで寝ないでよ」

マコ「あ、寝ません。……寝ませんよ」

さくら「連絡ぐらいしたらいいのに」

マコ「ああ。そうね。そうだけど、気づいたら東京駅で切符買った、ごめん」

マコ「あんたも、やる気なさそな仕事してるね」

さくら「え、わかる」

マコ「うん。キーボード打つ音の響きで」

マコ「あー。こっちはやっぱり星がきれいねー。あ、流れ星」

さくら「え。それ寝言？」

2

朝。

土方佳織が朝ごはんを食べている。台所には、さくら、朝ごはんの支度。

マコ、目を覚ます。

佳織「おはようございます。外は、夏らしい朝ですよ」

マコ「誰」

佳織、食事を続ける。さくら、目玉焼きを持ってきて。

さくら「隣の土方さんちの佳織さん。毎朝、タマゴ届けてくれるの」

マコ「ごはん食べてるよ」

さくら「ああ。なんか、そのまま食べていくのが習慣なの」

マコ「へー」

さくら「マコも食べる」

マコ「うん」

さくら、台所へ。

マコ「どうも。森マコです」

佳織、笑顔で食事。

さくら、目玉焼きを持って来る。

さくら「いただきます」

マコ「う」(頭痛)

さくら「ああ。やっぱり」

マコ「そっか、飲んだんだ。……うわ、これ(一升瓶)あけたんだ」

さくら「いろいろとご相談に乗っていただき、ありがとうございます」

マコ「え。あ、そう。覚えてない」

さくら「いいのいいの。聞いてくれたら、それでいいの」

マコ「さくら、なんともないの」

さくら「うん」

さくら、食べる。

マコ「隣の土方さんちって、誰も戻って来てないでしょ」

さくら「え、あ、うん。おじいさんもおばあさんも、市内のほうで亡くなったみたい」

マコ「ああ。避難先で」

佳織「はい。今は、私一人で住んでいます」

マコ「そうですか」

さくら「佳織さん、私の先生。裏の畑の。知ってた。野菜作るのって、化学の知識が必要なのよ、ねえ。佳織さん。すごいんだから」

佳織「いやあ」

さくら「で、とうとう、ナスビ、できたのよ。うちの畑で」

マコ「へー。去年は、ダメだったのにね」

さくら「そうよ。だから佳織さんのおかげよ」

佳織「もともとの土がよかったんですよ」

さくら「よ。野菜マイスター佳織」

佳織「はは」

佳織、食器を片付けて。

佳織「ごちそうさまです」

と、台所に去り、「さよなら」と家を出る。

さくら「はい。また、あしたー」

マコ「じゃ、さくらと一緒にだね。実家に一人ぼっちって」

さくら「その事情には違いがありますがね」

マコ「あ、そう」

さくら「なんか、嫁ぎ先で、うまくいかなかったみたい」

マコ「そうか」

さくら「眼底骨折。こっちの目の奥。旦那に殴られて」

マコ「げっ。やーね、全く」

さくら「ピカソの絵みたいだったでしょ、こっちの目」

マコ「それ失礼だろ」

さくら「ピカソに」

マコ「佳織さんにでしょ」

さくら「あ、ごめん」

マコ「私にあやまらなくていいよ」

マコ「あーもー。こういうことあると、ますます、男いらねーってなるな」

さくら「でも、マコはもうその心配は通り越してるわけでしょ」

マコ「どういう意味よ。通り越すって」

さくら「なんていうかな。こう、ある境地に達してるっていうか」

マコ「人を仙人みたいに言わないでよ」

さくら「あ、今日マコどうすんの」

マコ「どうすんのって。なに、ぐだぐだするよ」

さくら「ああ、そう」

マコ「え、それ追い出しモードじゃん。歓待の心はどこ行った」

さくら「いや、そうじゃなくって。ちょっと、お昼から買い出し行ってこよって思って」

マコ「いわき」

さくら「そうそう。一緒に行く？」

マコ「今日はゆっくりする」

さくら「そっか。じゃ、留守番しててくれる」

マコ「うん」

さくら「大丈夫？できる、お留守番」

マコ「あのさ、私をいくつだと思ってるの」

さくら「でもイノシシとか来るから」

マコ「え。イノシシ」

さくら「最近、多いのよ」

マコ「へー」

さくら「裏の畑、守ってね。ケモノからナスビとか守ってね」

マコ「お、おう。え、でも、出るの、マジで」

さくら「出る出る」

マコ「ええ」

さくら「野犬とかも出る」

マコ「野生の王国じゃん」

さくら「このへん、いたるところケモノの通り道だから」

マコ「え、でも、出たらどうすんの、私、わーイノシシ出たーって見てるしかないけど」

さくら「まあ、ほとんど昼には出ないよ」

マコ「そう。それならいいけど」

さくら「なんかあったら、佳織さんに電話して。これ番号」

マコ「はい」

マコ「え。佳織さん、どうすんのイノシシ」

さくら「捕獲するのよ」

マコ「どうやって」

さくら「猟銃で」

マコ「えー。す、すごい」

さくら「こっちの目で狙いを定めて、ズドーン」

マコ「わー、すごいすごい」

さくら「スナイパー佳織。ズドーン。……ズドーン」

マコ「百発百中だー」

3

その夜。

マコ、スケッチブックと色鉛筆を荷物から出して、整理している。

玄関で人の気配して。

マコ「あ、帰ってきた」(玄関へ)

さくら「ただいまー」

マコ「わ。お酒臭い。え、なに」

さくら「どうぞどうぞ、あがって」

黒田「いいんすか」

さくら「いいから、あがれあがれ」

岩下「失礼しまーす」

マコ「なに、この人たち」

さくら「黒田くんと岩下くん」

黒田「黒田です」

岩下「岩下です」

さくら「帰りに電車で一緒になって。浜通り旅行してるんだって。なあ」

黒田「ええ。北上旅行です。恐山まで行きます」

マコ「え、歩いて」

黒田「いや、まあ、ヒッチハイクとかで。さくらさん、これ、どうします」(買い出しの荷物)

さくら「あ、じゃ、ナマモノは冷蔵庫にお願いね。あ。それも台所のほうに、やー、助かった、ありがとねー」

黒田と岩下、台所に荷物を運び入れる。

マコ「飲んだの」

さくら「ああ。うん、ちょっとね駅前で」

マコ「学生？」

さくら「違うんじゃない。お腹減ってるっていうから」

マコ「え、お金出したの」

さくら「うん」

マコ「全部？」

さくら「うん」

マコ「え、も一たかられてんじゃん」

さくら「だって、面白いのよ、この人たち。ねー。あれやってあれ、さっきのあれ」

黒田「はいはい、また、後で」(と来る)

さくら「あ、そうだ。紹介しなきゃ。こちらが森マコさん。私の親友。職業は絵描きさん」

黒田「すいません。突然お邪魔して」

マコ「いえいえ」

さくら「岩下くんは写真撮ってるんだって。ねえ」

岩下「はい」

さくら「なんか、ブログとかやってんでしょ」

黒田「ええ。旅先の美味しいものとかレポートしてます。おれが文章書いて、こいつの写真載せるんです」

さくら「はい、じゃあ、記念写真」

4人で記念写真。

岩下「あ。じゃちょっと、もう少し、近づいてもらって」

さくら「あ、はい」

黒田「フェイスブックに載せませーす」

さくら「はーい」

マコ「あ、そういうのちょっと、私あれなんで」

黒田「ああ、そうすか。じゃ、こいつ今度、仙台のギャラリーで個展開くんで、その時にでも」

マコ「それもやめてください」

黒田「え、そうですか」

岩下「じゃ、撮りますよ。はい。オッケーノ」

岩下、なぜか首を傾げ。

岩下「もう一度行きますー。オッケーノ」

岩下、首を傾げ。

さくら「え、まだー」

黒田「あいつ、なーんか、こだわりあるんすよねー」

岩下「……オッケーノ」

さくら「いけたあ」

岩下「えー。はい」

皆、ばらける。

さくら「きみたち、なんか飲む？」

黒田「はあ。いや、けっこう、もう飲みましたよ」

さくら「台所になんでもあるんで、適当にやってくれたまえ」

黒田・岩下「うーす」

岩下、家の中の写真を撮っている。

岩下「ここ、わりと古い家ですよ。昭和とかですか、できたの」

さくら「うちのおじいさんの代じゃないかな」

カメラをマコに向けるので。

マコ「ちょっ、やめてって」

黒田「いやーでも、スナック蟻地獄ってすごくないですか」

さくら「ああ、名前でしょ」

黒田「名前もだけど。ママさんすげー美人で、びっくりしました」

さくら「ずーっとやってるのよね、あそこだけは。昔は、もっと、いくつかあったんだけどね、お店も」

岩下「こっち奥もあるんですか」

さくら「うん」

岩下「見てきていいですか」

さくら「いいよ。座敷に泊まる？布団とかあるから、適当にやってね」（と寝る）

黒田「あざーす」

マコ「お座敷は、今私使ってるから、離れはどう」

黒田「あ、そうすか、離れもあるんすか」

マコ「じゃ、こっちついて来て」

黒田「はい。失礼しまーす」

マコが案内する。岩下に続いて黒田も奥へ。

さくらの寝息。

マコ、戻って来て。

マコ「ちょっと、そこで寝ちゃダメだって。ほら、仕事するんじゃないの。ラジオドラマ」

マコ「もー」

マコ、さくらにタオルケットをかける。

さくら「……古い家がそんなに珍しいのかな」

マコ「ああ。……え、なに、寝言？」

男たちの笑い声。

マコ「大丈夫か、あいつら」

さくら「……悪さする顔には見えないよ」

マコ「見えるよ」

黒田、戻って来て。

黒田「座敷も、むっちゃ広いすね。掛け軸、なんて読むんですかね」

マコ「臥薪嘗胆」

黒田「へー。あら、さくらさん寝たんですか」

マコ「うん、そうみたい」

黒田、缶ビールを開けて、飲む。

黒田「ひー。うまいっすねー」

マコ「……」

黒田「あー。ここかー。ここで書いてるんですねー。脚本家、石本さくら」

岩下、来て。さくらのパソコンの写真を撮りまくる。

黒田「あ。岩下、ビール飲む」

岩下「お、じゃ、いただきますかな」

黒田「おれら、さくらさんのファンなんすよ」

岩下「え。おまえ、さくらさんの作品、見たことあんの」

黒田「ない。おまえは」

岩下「ないよ」

黒田「いや、だってさ。テレビとかやってないって言ってたよ」

岩下「さっき、会ったばかりでファンとか失礼だろ」

黒田「でもさーさくらさん、いい女じゃん」

岩下「ああ。そういう意味でファンてこと」

黒田「そうそう」

岩下「このこの」

二人、笑う。

マコ「おまえらさ、それ自分で買ったのか」

黒田「え。あ、いや。さくらさんが買ってくれたんすよー」

マコ「缶ビールくらい自分で買えよ」

マコ、二人の缶ビールをもぎ取り。

マコ「うるせえし、とっとと向こう行ってくれ。な、離れに布団敷いたから」

岩下「なんだ。このお婆はん」

マコ、岩下のカメラをもぎ取り、

岩下「あ」

カメラの中のSDカードを抜いて、自分の口に入れる。

岩下「あ。食べた」

マコ、口をもぐもぐ。

岩下「わー」

岩下、マコの口へ手を入れようとする。黒田、マコを捕まえて。

黒田「出せよ。出せよ。おい、早く、出せよ」

さくら、目を覚まして。

さくら「え、なにしてんの。なに、やってるのよ。やめなさいよ」(と、3人に参戦する)

4人は、混沌のうちに闘争を継続する。

4

昼。

さくら、パソコンで工作中。奮闘しヒートアップする気分をウチワで時々清涼。

そこにシャワーを浴びて来て、くつろぐマコ。

マコ「あー。気持ちいい。水風呂、気持ちいい」

髪をかわかす。

マコ「ふー」

マコ「ね。カルピス飲む？」

さくら「うん」

マコ「カルピスカルピスー」

マコ、台所へ行き、さくらの机の上にカルピスを置く。

マコ「あー。暑い。暑いといいなー。田舎の夏、いいなー」

マコ「扇風機、当たってる？」

さくら「うん」

マコ「あー。でも、夏。私嫌いじゃない」

マコ「さくらもシャワー浴びたらいいのに。気持ちいいよ」

さくら「うん。あとで」

マコ「あ、さくら、氷溶けるよ、カルピス」

さくら「あーもー。うるさい」

マコ「え」

さくら「うるさいよ」

マコ、スケッチを用意して、さくらの後ろ姿を描く。

マコ「西瓜を食べてた 夏休み。水まきしたっけ 夏休み。ひまわり 夕立 夏休み」(鼻歌)

さくら、急にカルピスを飲みほし。マコを見て笑う。

マコ「え、なに」

さくら「いや。座敷の掛け軸」

マコ「うん。どうした」

さくら「ない」

マコ「え！」

さくら「きれいさっぱり、ない」

マコ、見に行く。戻って来て。

マコ「ほんとだ、ない。え、なんで」

マコ「ええ！うそ。あいつら！」

さくら「たぶんね」

マコ「わー。くそー」

さくら「そうとしか考えられないでしょ」

マコ「えー。私の寝てる間ってこと」

さくら「よっぽど困ってたんだな」

マコ「はらたつなー。まったく気づかなかった。臥薪嘗胆も読めなかつたくせに」

さくら「あんなの二束三文でしょ。虫食いだらけだったし」

マコ「ほか盗られてないの」

さくら「たぶん、大丈夫だと思うけど」

マコ「え。じゃ、掛け軸だけってこと」

さくら「うん。家中確かめたら、なんかなくなってるかもしれないけど」

マコ「いやー。あいた口が塞がらないね」

さくら「マコの予感が的中したよ」

さくらとマコ、作業に戻る。

マコ「じゃ、あたし、寝顔、見られたってこと」

さくら「まーねー」

マコ「やーねーもー。ま、いいか、寝顔の一つや二つ」

さくら「そんな、やつらも、じっと見る余裕ないでしょ。泥棒してるわけだから」

マコ「そーね」

さくら「マコ、寝顔、かわいいよ」

マコ「え。うそ」

さくら「かわいいかわいい」

マコ「初めて言われた」

マコ「寝顔美人か」

さくら「うん。そうそう」

マコ「やだ。寝顔美人。もてそうにないし」

さくら「なんで」

マコ「私、実は、寝顔美人なんですー。とか、言えないじゃない」

さくら「え、なんで」

マコ「なんか、一緒に寝るの誘ってるみたいだし。相手はしかも起きてなきゃいけないし」

さくら「あー。寝顔美人は大変だ」

マコ「そーっと来て、そーっと持ってったのかな」

さくら「ああ。うん」

マコ「抜き足差し足で」

さくら「うん」

マコ「広げたまんま」

さくら「外出て巻いたね、きつと」

マコ「広げたまんま、抜き足差し足はかなりまぬけだよ」

さくら「だって、あれ、巻くと音出るもん。シュルシュルシュルって」

マコ「あー。じゃ、外で巻いたな」

マコ「忍者みたい」

さくら「え」

マコ「忍者みたい」

さくら「そう？」

マコ「忍者、あんなの持ってるでしょ」

さくら「ああ、忍法かなんかが書いてあるみたい。いや、それにしちやでかいよ」

マコ「あ、そうか。第一邪魔だよ」

しばらくして、さくら、小刻みに笑う。

マコ「え」

さくら「いや、だって」

マコ「え、なに」

さくら「なんだっけ、写真撮ってたほう、名前忘れちゃった」

マコ「ああ、岩下」

さくら「そうそう、岩下。その岩下が、写真撮る前にさ、オッケーノって」
マコ「え？」
さくら「オッケーノ」
マコ「ああ、言ってた言ってた、オッケーノって。あれなにオッケーノって」
さくら「うう、だめ、おなか痛い」
マコ「はーい。オッケーノとか、言ってた」
さくら「うぐうぐぐぐぐ」
マコ「オッケーはいいとしてもさ、ノがわかんないよな」
さくら「ひーやめて」

さくら、ひとしきり笑って。仕事に戻る。
マコもスケッチを続ける。

5

夜。食後。

マコ、さくらにポーズをとらせ、本格的に肖像画を描いている。

マコ「ちょっと、動かない」

マコ「なんかね、さくら、今日はね、私、いいもの描けそうよ」

さくら「のど渴いたな」

マコ「がまんがまん」

さくら「あー。私もドラマが書きたいよー」

マコ「がまんがまん」

さくら「恋愛ドラマ、純愛物が書きたいよー」

マコ「無理無理」

さくら「なーんで私だけこんな目にあってるのかなー」

マコ「あ。そうだ。あんたの書くシナリオの、映画のタイトル、なんとかしてよ。友達に紹介できないんだけど」

さくら「ああ」

マコ「肉棒になった男とか。解放されたエロ下着とか」

さくら「まーねー」

マコ「干からびた陰毛とか」

さくら「まーまー題名なんか口に出して見に行くもんでもないでしょ。内に秘めて銀幕に對峙する、それが真っ当な映画の鑑賞法」

マコ「干からびた陰毛なんか内に秘めたくないよ」

さくら「わりといい題名だと思うけどな」

さくら「あー。もー。ビール、飲ましてくれー」

マコ「がまんがまん」

双子が縁側に来て、スイカを食べる。

マコ「お。なんだ、こいつら」

さくら「あ、双子」

マコ「スイカ食ってる」

さくら「さては、近所の畑で盗んで来たな」

マコ「え、双子？ま、似てなくもないが」

さくら「二卵性らしいよ。お姉さんはどっち」

双子（姉）、手をあげる。

マコ「じゃ、そっちは弟か」

さくら「おい。たね飛ばすな」

さくら「おいこら。たね飛ばすなって」

さくら「向こうで食え、向こうで。しっしっ」

マコ「そんな、犬じゃないんだから」

玄関で、「こんばんは」と佳織の声。

さくら「あ、佳織さんかな」

さくら、玄関へ。

マコ「きみたち、いくつ」

佳織の話聞いていた、さくらの声、「えー」と聞こえる。

マコ「小学生、中学生、高校生じゃないよね。……え、もしかして学校とか行ってないの」

さくら、戻って来る。

さくら「あのね。佳織さん、好きな人できたんだって」

マコ「へー」

さくら「なんかねなんか、いわきの人で。バーテンダーなんだって。一軒お店も任されてるみたい」

マコ「へー」

さくら「いい男だってよ。わあー」

マコ「なに、あんた、うれしそうね」

さくら「うれしいわよ。だって、よかったじゃない、佳織さん」

さくら「私はね、佳織さんみたいな人にこそ、幸せになってほしいのよ」

さくら「で、今度の日曜日に、紹介したいからその彼氏連れて来るって」

マコ「へー。パーティー。お披露目パーティー」

さくら「カクテルとか作ってくれるかしら」

マコ「ドライマティーニとか」

さくら「マルガリータとか」

マコ「グラスのフチとかに、塩まぶしてあってさ」

さくら「塩？」

マコ「そう、塩よ塩」

さくら「塩、まぶすって？」

マコ「いいよ、もう」

さくら「きみの瞳に、乾杯とか言って」

マコ「ひょー」

マコ「はい。じゃ、さっきのポーズ」

さくら、肖像画のポーズ。

マコ「きみたち帰らなくていいの。家の人、心配するよ」（と、双子に）

さくら「親とかいないんじゃないかな」

マコ「え、あそう」

さくら「ここいらの空き家。寝泊まりしてるみたいだけど」

マコ、絵を描く。

マコ「ね、私も、幸せになっていいよね」

さくら「え、いいに決まってるでしょ」

マコ「っていうか私たちにもよ」

さくら「は。なに、言ってるの」

マコ「私たちにも、幸せがやって来るのかな」

双子も黙って二人を見ている。

さくら「うーん」

マコ「さくら、ポーズ、考える人になってるよ」

6

深夜。

さくらは仕事に疲れて眠ったようだ。

マコ、廊下を通り過ぎる。便所に行って、戻ってくる。

マコ「さくら、そっち行っていい」

さくら「いいよ」

マコ、さくらの枕もとにちょこんとすわる。

マコ「ね、聞いて。さっき、双子の夢を見た。双子の片一ぼうがとっても饒舌なの」

さくら「どっち」

マコ「どっちかな」

マコ「あ。お姉さんのほうだったかな」

双子（姉）現れて。

双子（姉）「つくるときはレゴブロック。そう、小さな断片の積み重ね。それをどんどん小さくしていく。すると、それらは空間から時間の次元へ、力の水準へと移行するのだ」

さくら「どういう意味」

マコ「わかんない」

マコ「私はね、その夢を見ながら。なんというか、なにかをつくるじゃない私たちも。私たちがなにかをつくる時の考えかたを言ってるんじゃないかと思ったの」

さくら「もう一人の双子はどうしたの。双子はいつも二人で一つよ」

マコ「うん、それでね。もういっぽうの双子は」

さくら「弟のほう」

マコ「そう弟のほうは」

双子（弟）、立っている。

マコ「それを言う、姉さんのほうを見ながら、ただ立っているだけだった」

さくら「なにも言わないで」

マコ「ええ。黙って悲しい顔してた」

双子（弟）、悲しげに立っている。

7

日曜日の昼。

食卓を囲んだ人々。佳織と勇作を中心に、さくらとマコ。そして双子。乾杯の準備がととのって。

マコ「さくら、乾杯の音頭」

さくら「お。わたくしが？」

マコ「一応、家主だし」

さくら「はい。では、佳織さんとえっと」

マコ「いつもはなんて呼んでるの」

佳織「あ。えと。勇作さん、です」

マコ「ゆーさくさん。ひゅーひゅー。ゆーうさくさーん」

さくら「勇作さんは、かおりんのことを、かおりん？」

勇作「いや、ま、普通に佳織さんですけど」

佳織「え」

マコ「あ、違うの」

勇作「ああ、まあ、佳織とかも、ですかね」

マコ「わおー。かおりー、まい、らぶー」

さくら「じゃ、佳織さんと勇作さんの前途あるこれからを祝しまして。乾杯」

皆「かんぱーい」

さくら「これが、マコさんがつくった、肉じゃがとコロッケ。そしてポテトサラダ」

マコ「ごめんなさい。芋的なものばっかで」

佳織「おいしそう。ねえ」

勇作「うん。肉じゃがとか大好物です」

さくら「男の人って、芋が好きなのよねー。カレーライス of 具だって、大ぶりのジャガイモがいいのよねー」

マコ「え。そうなの。えー。そんなつもりもなかったですよ。そんな、男の人が芋が好きだからって、私、芋料理の代表格を並べたわけじゃないですよ」

さくら「マコ、大丈夫よ。誰もそんなふーには誤解しないから」

マコ「あ。そーう」

さくら「はい。で、こっちがフライパンで私がつくった円盤餃子っすー」

佳織「わー。おいしそう、ね」

勇作「ええ。見事なできです」

さくら「えーそうですかー」

勇作「このまま上に浮かんで行きそうです」

さくら「あら、見た目より、味で評価してくださらない」

マコ「いただきまーす」

皆「いただきまーす」

皆、食べる。

双子が礼儀知らずに食べるので。

さくら「おい、手で掴むなって」

さくら「あんたも、お箸あるでしょう」

皆、ひとしきり飲み食いしたところで。

勇作「今日は、なんと申しますか、ご近所のかたから、お呼ばれがあるって佳織さんに聞いて、ちょっと恐縮していたんですけど。と、いうのも。……こういうのなんか、おれ、慣れてなくて。でも、みなさんいいかたばかりで。……さくらさんもマコさんも。そして、双子のみんなも、ありがとう。……サンキュー。サンキューフォーおいしい料理。サンキューフォーユアカインドネス。ああ。えっと。それから、佳織さん。佳織。大事な佳織。これからもよろしくな」

佳織をはじめ皆、照れ臭い。

勇作「……ありがとうございましたー」

皆、拍手する。

勇作「あ。よかったら、飲みにきてください」(店のカードを渡す)

さくら「ほー。スタンディングバー、ゴホウビ。へー」

勇作「立ち飲みのなあれなんで、とっても気楽ですよ」

マコ「佳織さんもよく行くの」

佳織「ええ」

マコ「そこでくどかれたとか。がはっ」

佳織「ええ。で、そのときキスされて。帰り道ですけど。そのキスの仕方のあざやかさと言ったらなかったんで、びっくりして、そのあざやかさ、うまさ、あ、うまいなでとどまればよかったんだけど、それってけっこうこの人のキス、経験豊富なんじゃないか？とか、ちょっとした不安のサイクルに落ちちゃいまして。でも、そういうふうじゃいけないと思うんです。キスのうまさ、そのキスのうまさあざやかさにうっとりした感触をしっかり感じるべきでしょうし。そのうまさの根拠のほうとかに気持ち持ってかれたら、いけないと思った次第です、はい」

さくら「こら、耳ふさげ。子供には毒だ」(双子に)

佳織「おいしいこの餃子！」

さくら「え、もう終わり？」

さくら「終わりだって」(双子に)

皆、拍手。

8

マコの肖像画の世界。

マコとさくらの声のガイド付き。

絵に描かれた人物は舞台上にポーズをとる。

さくら「あ、スケッチブック。見ていい」

マコ「うん。いいよ」

マコ、スケッチブックを開く。

さくら「ずいぶん描いたわね。ここに来てからでしょ」

マコ「暇だったからね」

さくら「ああ。黒田じゃん。絵にするとそんなに悪い顔してないけど」

マコ「私の描き方がいいんだよ」

さくら「これを見て改心しろっての」

さくら「わ、出た、岩下。あんたやっぱ感じつかむのうまいね」

マコ「ま、ね。一応、プロだから」

さくら「いやー。まざまざと思い出しちゃうな」

マコ「二人、一緒のやつとか、あるよ」

さくら「うわー。なにこれ、はらたつなー。絵、鑑賞するっていうより、怒りのほうが蘇ってくる」

さくら「あ、双子」

さくら「どっち」

マコ「弟」

さくら「ああ。こっちが、お姉さん」

マコ「で、これは、二人揃っての肖像画」

さくら「やっぱ、似てるわね」

さくら「あ。これは佳織さん」

さくら「どうしてこっち側の横顔にしたの」

マコ「どうしてかな」

さくら「なんか、悲しそう」

マコ「勇作さん」

さくら「おーイケメンね」

マコ「こっちは二人のポートレート」

さくら「幸せになってほしいね」

マコ「うん」

さくらとマコ、歌う。

肖像画のなかのみんなも、歌に合わせて動く。

9

夕方。夏の終わり。

マコ、夕暮れどきに、佇んでいる。

マコ「お盆過ぎると、風が変わる」

マコ「東京がわたしを呼んでいる」

いつのまにか双子（姉）が立っている。

マコ「お。なんだ。きみか」

マコ「私のセリフ聞こえた？」

マコ「聞こえていたら、恥ずかしいな」

双子（姉）「……お盆すぎると、風の中にも秋が混じります」

マコ「そうだね」

双子（姉）「ときがたてばわかります」

マコ「そうか」

マコ「え、なにが」

双子（姉）、いつのまにか、去る。

血相をかえたさくら、来る。

さくら「双子が死んじゃった」

マコ「え。今、だって」

さくら「国道6号線を海のほうへ渡るところで、南下するダンプに轢かれちゃった」

マコ「えー」

さくら「もう一人は助かったんだけど。行方が分からなくなって、近所のみんなで探してるの」

マコ「だから、今、会ってた私」

さくら「え」

マコ「双子に会ってた」

マコ「会って、あれ、なんかしゃべったよ」

さくら「え。どっち」

マコ「どっちだろ。どっちが死んだの」

さくら「だから、わかんない」

マコ「死んだのはね。弟のほう」

さくら「どうして」

マコ「だって、私、夢で見たもの。だから、よくわかる。死んだのはあの子よ。弟のほう」

マコ「とっても悲しい顔してた」

マコ「……私が、あんな夢、見たばかりに」

さくら「そんなの関係あるわけないでしょ！」

10

朝。

荷造りし終えた、マコがいる。

喪服に着替えたさくら、来て。

さくら「あ。やっぱり、帰る」

マコ「うん。お世話になりました」

さくら「いえいえ。なんのおかまいもできず」

マコ「さくら。喪服じゃん」

さくら「うん。近所のみんなでお葬式出すことになった」

マコ「そう。もう片一ぼうは、見つかった？」

さくら「まだ。でさ。そもそも最初からいなかった説がささやかれている」

マコ「どういうこと」

さくら「一人しかいないのを、私たちが勝手にダブって見てたってこと、蜃気楼みたいに」

マコ「ああ。なるほど。死体になって初めてわかったってこと？」

さくら「そう。あの双子が一体どこの誰だか、誰もわかってなかったんだから。本人もなにもしゃべらないし」

マコ「でも、そんなことある？ 一人を二人に、二重にして見るなんて」

さくら「奇妙な話よね」

マコ「じゃ、私は、あのとき。なにを見たんだろう」

さくら「それ、絵でしょ」

マコ「うん？」

さくら「それよ。私の肖像画でしょ」

マコ「うん」

さくら「描けたの」

マコ「ああ、うん」

さくら「見せてよ」

マコ「やだ」

さくら「なんで」

マコ「恥ずかしい」

さくら「マコに恥ずかしいとかあるの」

マコ「あるよ。さくらを絵に描いたのなら、あるかな」

さくら「え。なんで」

マコ「喪服のきみーは、すすきのかんざしー、るるるールルウルー。妙に色っぽいね」

さくら「浴衣でしょ」

マコ「なんか、神崎先生が亡くなったときのことを、思い出す」

さくら「ああ。大学のときの」

マコ「さくら、あのときも、そんな喪服着てた。私、まだ、そんなの持っていないから、ジー
ンズ履いて、ここに腕章はめて出席したの覚えてる」

さくら「え。あれ就活用のスーツよ」

マコ「あ、そうなの」

さくら「マコが就活してなかっただけでしょ。みんな黒いスーツで来てたよ」

マコ「そうか、あれ、喪服じゃなかったのか」

さくら「まあ、喪服みたいなもんだけど」

マコ「私、あのときから、みんなから浮いてたような気がするな」

さくら「そうね。マコはずっとマイペースだね」

マコ「絵。そこの壁にかけとくから、お葬式からかえったら見て」

さくら「うん」

さくら「じゃ。またね。いつでも遊びにおいでよ」

マコ「うん」

さくら「ただし、今度は事前に連絡ちょうだい」

マコ「はい」

さくら、去る。

マコ、身支度を整え。

マコ、壁に絵を掛ける。

それをしばらく見つめて。